琉球大学学術リポジトリ

越境する生活史と当事者支援
―在伯ウチナーンチュ・在日ブラジル人女性としての経験を読み解く―

メタデータ	言語: ja 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2023-05-12 キーワード (Ja): 当事者支援, 越境する生活史, 在日外国人, 沖縄移民, ジェンダー キーワード (En): peer support, transnational life story, foreigners in Japan, Okinawan migrants gender 作成者: 藤浪, 海 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019827

移民研究 第19号　2023　63-86

越境する生活史と当事者支援
―― 在伯ウチナーンチュ・在日ブラジル人女性としての経験を読み解く ――

藤浪　海

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．ブラジルでの生活史――「居場所」としての沖縄会館と沖縄コミュニティへの違和感
Ⅲ．日本での生活史――日本語の習得と可視化された在日ブラジル人の困難
Ⅳ．当事者支援への考え――親への支援と日本人に開かれた居場所作り
Ⅴ．おわりに

キーワード：当事者支援，越境する生活史，在日外国人，沖縄移民，ジェンダー

Ⅰ．はじめに

1．問題関心――日本人にも開かれた居場所作りを志向する移民の当事者支援

司会（藤浪）：安富祖美智江さん，今日は貴重なお話ありがとうございました。皆さんも在日外国人の抱える問題に関心があれば，ぜひ ABC ジャパンでボランティアしてみてくださいね。

安富祖：ボランティアじゃなくてもいいよ。ただ話をしにくるだけでもいいよ！

（2022 年 11 月 24 日　横浜市内の大学における国際交流イベントでの発言）

京浜工業地帯の中核として在日コリアンや沖縄出身者など多様な出自をもつ人々が集ってきた横浜市鶴見区には，1980 年代以降，バブル景気の人手不足のなかで多くの南米出身者（とくに沖縄ルーツの人々）が集住するようになった。現在では中国やフィリピン，ネパール，ベトナムなどアジア出身のニューカマーも多く暮らすようになり，多様な民族的出自をもつ人々が暮らす街となっている。

このような地域で移民支援の拠点となっている団体が，冒頭の発言をした安富祖美智江さん（ブラジル出身の沖縄系 2 世）が理事長を務める NPO 法人 ABC ジャパンである。2000 年に結成された同団体の専任職員は，安富祖さん含めたった 2 名であるが，南米系住民や行政・教育・福祉機関等との広範なネットワークを有しており，移民の子どもの教育保障を中心に，移民の自立支援やメンタルケアなど多岐にわたる取り組みを展開している。

ここで注目したいのは，冒頭の発言に象徴されるように，安富祖さんが当該団体を移民にとっての居場所とするだけでなく日本人にも開かれた場とすることを志向していることである[1)]。実際にこの団体の参与観察をしていると，多様な人々がふらりとやってくる場面に出くわす。たとえばかつてボランティアや区役所職員として，あるいはイベントで偶然出会った知人としてこの団体にかかわった人々が来訪し，しばらく雑談をして帰っていくこともしばしばである。多くの移民支援団体がそうであるように，当該団体も移民にとっての居場所となることを志向しているのだが，安富祖さんがこのように日本人にも開かれた場所であることを目指す背景にはどのような思いがあるのだろうか。

実は当該団体のこうした特徴には，安富祖さん自身が日本でブラジル人として直面してきた経験のみならず，ブラジルで沖縄系 2 世として暮らしてきたその生活史が深くかかわっている。しかし後述のように在日ブラジル人研究では，社会的脆弱性を抱えた異質な「外国人」としてのみかれらを措定する傾向があり――無論その背景にはかれらへの支援の必要性を社会に訴えねばならない状況があったのだが――日本社会との親和性を暗に示しかねないとして「日系」（あるいは「沖縄系」）としての側面は捨象され，またその「脆弱な外国人」像から逸脱する当事者支援もほとんど取り上げられてこなかった。しかしこうした視座では，社会的脆弱性のなかで見出されるかれら自身の思いや主体性をも見落とすことになりかねない。そこで本稿では，安富祖さんによる当事者支援の活動を事例として取り上げながら，移民自身が当事者支援に込める思いとその社会的背景を浮上させてみたい。

2. 先行研究――移民研究と移民史研究の分断を乗り越える

1990 年に出入国管理及び難民認定法（以下，入管法）が改定され，ブラジルから多くの人々が来日するようになって以来，在日ブラジル人に関しては数多くの研究が蓄積されてきた。その代表的な研究が梶田・丹野・樋口（2005）であることは言を俟たないだろう。かれらによれば，日系ブラジル人には「日本にルーツをもつ」というエスニックな背景に基づき定住資格が付与されたが，それゆえに国家としてかれらの統合政策が採られることはなかった。また市場媒介型移住システムのもとで移住が進行し，労働市場には「フレキシブルな労働力」として組み込まれたがために，ブラジル人相互の共助がなされづらくなったばかりか，地域社会において「顔の見えない」存在となった。こうした状況のなかで，在日ブラジル人は多くの社会的困難を抱えることとなったという。こうした知見をもとに，多くの在日ブラジル人研究がかれらの立場の脆弱性を社会に訴え，そしてそれによりかれらが抱える諸問題の解決を促してきた（たとえば小内編 2010，井沢 2013）。

ただし，ここで注意しなければならないことが二つある。一つはそうした社会的脆弱性

ゆえにこそブラジル人による当事者支援も行われてきたのだが，山野上（2021）などごく一部の研究を除き，「脆弱な外国人」像から逸脱するそうした姿はほとんど描かれてこなかったことである。しかしながら，当事者支援には移民自身の思いや悩みが具体的な形で反映されやすい。このことを踏まえれば，当事者支援への注目はかれらのニーズや思いをくみ取り，共生のあり方を再考する契機にもなるはずである。

もう一つ注意すべきは，「外国人」としての脆弱性が強調されることで，日系（あるいは沖縄系）としての側面が捨象されてきたことである。「ブラジルでは『日本人』と呼ばれ，日本では『ガイジン』扱いされ，アイデンティティの危機に陥った」という語りは，筆者もこれまでの調査のなかで幾度となく耳にしてきた[2)]。しかしこの点は日本の在日ブラジル人研究ではほとんど取り上げられず，ブラジルと日本，それぞれでの生活史を連続的に把握しようとする試みもほとんどなされてこなかった[3)]。日本から海外への移住を検討してきた移民史研究（主に歴史学や地理学）と海外から日本への移住を検討してきた移民研究（主に社会学），それぞれのパースペクティブのもとで，一人の人間の生が「在外日系人」「在日外国人」として別個に把握されてきたのである。伊豫谷（2007）が指摘する移民研究と移民史研究の断絶を乗り越えていく必要性が，ここに示唆されている。

そうしたなかにあって鶴見に暮らす沖縄系の南米出身者の歴史的な移住過程を検討した藤浪（2020）は，そうした限界を乗り越えようとしたものである。しかしその分析の水準は個人というよりも集団レベルに置かれ，在日ブラジル人個人の生活史のなかに沖縄系としての歴史性がいかに反映されているのかは十分検討されていない。当事者支援を行うブラジル人がその活動に込める思いを読み解くためにまず必要となるのは，その活動を展開する個人を焦点化したうえで，彼／彼女がいかに自身の国境を越える生活史との関係においてその活動の方向性を模索しているのかを明らかにすることであろう。

3. 研究課題と調査方法・対象

以上の先行研究の限界を踏まえ本稿では，安富祖さんが自身の生活史との関係において，いかに日本人にも開かれた移民の居場所作りを志向しているのかを検討する。筆者はボランティア支援者として，移民の子どもの教育保障事業を中心に 2012 年 7 月から 2017 年 3 月まで週 2 ～ 3 回程度，それ以降 2021 年まで月に 1 回程度，当該団体の参与観察を行ってきた。そのデータをもとに 2021 年 11 月に行った安富祖さんへの聞き取り調査が，本稿の主なデータとなる。以下，ABC ジャパンの活動概要と安富祖さんの生活史の概略を確認しておこう。

安富祖さんの両親は恩納村出身で，父親が 1957 年に，母親もその 2 ～ 3 年後に渡伯し，夫婦でカンピーナス市での綿花栽培に従事した後に，1969 年にサンパウロ市近郊の

マウアー市へ自営農家として移住している。1975 年には朝市（フェイラ）でのパステウ販売に切り替え, 第三子として 1968 年に生まれた安富祖さん自身もその仕事を手伝った。両親が友人らとともに建設した沖縄会館は，安富祖さんにとっての居場所となったという。

1990 年に渡日し群馬県伊勢崎市の工場で働き始めた安富祖さんは，その労働のなかで日本語を習得していった。1993 年には先に渡日していた兄を頼り鶴見に移住する。鶴見ではブラジル料理店および国際電話代理店で働いたが，2000 年に ABC ジャパンを結成し，現在に至っている。ABC ジャパンの専任職員は安富祖さんと日本人女性の 2 名のみで[4]，安富祖さんは結成以来，当事者として事業の方向性や内容を決定する立場を担ってきた。

ABC ジャパンが現在展開しているのは，主に以下の 4 つの事業である。第一の「大人の自立支援」については，日本語教室や相談対応，各種生活ガイダンス（福祉制度やマイナンバー，確定申告，教育制度，在留制度等に関する内容）を展開しているほか，2016 年からは第二種電気工事士試験対策講座も開講している。これは電気設備業者としての労働者が多いこの地域の南米出身者に資格取得を促し，その経済面での安定化を図ろうとするものである。この講座の受講者はほぼ全員が男性である一方，上述の日本語教室の受講者は主に女性となっており，学校行事や家事に関する日本語など彼女らが母親として必要となる言葉の習得が目指されている（藤浪 2020）。

第二の「こころのサポート」は，当該団体の理事でポルトガル語に通じた公認心理師が個別あるいはグループでのカウンセリングに応じている。これはコロナ禍で経済的困難やストレスを抱え，また長期にわたる自宅待機の中で親子関係が悪化した移民から多くの相談が寄せられ始まった取り組みで（藤浪 2021），現在は公認心理師による対応のほかに，移民の子どもの支援に携わってきた移民 2 世による子どもへの相談対応も実施されている。

第三の「子どもの教育保障」は，安富祖さんが現在最も力を入れていると語る取り組みであり，移民の子ども向けのフリースクールや母語母文化教室（ブラジルおよび中国），中高生向けの進路ガイダンス等が実施されている。安富祖さんによれば，ここで重視しているのは次の 2 点であるという。第一に，「居場所」としての役割に重きを置いている。球技大会や遠足，クリスマス会，移民の子ども同士の先輩後輩交流会など，子どもたち同士の関係を深める取り組みが随時実施されており，かれらが安心できる居場所となるよう心掛けているという。第二に重視しているのは, 親への支援である。たとえばフリースクールに通う子どもに関しては，学習状況に関するレポートを月毎に各家庭の言語で作成し，また親を交えた面談も適宜実施するなど，親が子の状況を的確に把握できるよう配慮している（藤浪 2019a）。さらに小学校や中学校での学校生活はもちろんのこと，高校・大学進

学やキャリア形成に関するガイダンスやガイドブックも多言語（英語・ポルトガル語・スペイン語・中国語・タガログ語）で展開し，移民の親も日本の教育に関する知識を十全に習得できるよう工夫している。上述の日本語教室で運動会や文化祭といった地域の学校行事に合わせた日本語を学習しているのも，親が学校行事に参加しやすくなるようにするためだという（藤浪 2020）。

第四の「コミュニティ作り」に関しては，団体 HP の以下の文章が端的に示すように（ABC ジャパン 2022），移民のみならず日本人をも巻き込みさまざまな人々が協働し合うコミュニティの形成が目指されている。

> 私たちが考えるコミュニティとは，外国人コミュニティのことではありません。国籍関係なく，いろんな人がいるコミュニティとしてとらえています。鶴見には多くの外国人が暮らしていますが，日本人と外国人が関わる機会はあまりありません。そのために生まれてしまう誤解や無関心，それがきっかけで生じてしまう対立などがあるかもしれません。それを少しでもなくせるように，「〇〇人と〇〇人」ではなく，「人と人」として関われるようにするきっかけづくり，働きかけを行っています。

こうした方針のもと，地域イベントで移民の抱える困難への理解を促すブースを出店したり，学校・社会教育施設等と連携した日本人と移民の子どもの交流事業を展開したりしているほか，地域でのごみ拾いや消防活動などにも参加しつつ地域社会との積極的な交流が志向されている。また自然災害では移民から支援物資を集め被災地に送るなど[5)]，「被支援者」とされがちな外国人を日本人と対等な「市民」として位置づけなおす取り組みも展開している（藤浪 2020）。日本人との協働を志向するこのようなコミュニティへの考え方は，本稿冒頭の安富祖さんの発言とも通じるものであろう。

なお ABC ジャパンでこうした活動を主導する安富祖さんの存在は国内外で広く認知されており，2018 年にはその功績が認められブラジルのリオ・ブランコ国家勲章を，2019 年には日本の外務大臣表彰を受けている。

安富祖さんはなぜこのような移民への当事者支援を始め，日本人にも開かれた居場所作りを志向するようになったのだろうか。以下本稿では，安富祖さんの生活史をたどりながら，その経緯を検討していきたい。まず II 章では安富祖さんのブラジルでの生活史を，III 章では日本での生活史を検討し，IV 章でその生活史が団体での活動のあり方といかに関連づいているのかを検討する。最後に「おわりに」では，安富祖さんのブラジルでの沖縄系移民の子どもとしての経験，そして日本でのブラジル系移民の親としての経験，双方と関連付けられながら，現在の活動が展開されていることを確認する。

Ⅱ．ブラジルでの生活史――「居場所」としての沖縄会館と沖縄コミュニティへの違和感

1.「居場所」としての沖縄会館

安富祖さんの父親は沖縄の中部農林高校を卒業後，1957 年に産業開発青年隊としてブラジルに渡った人物である。母親も同じく恩納村出身で渡伯以前から父親と交際していたが，産業開発青年隊としては同行できなかったため，「はんこを借りてお父さんいない時に結婚して」，2 ～ 3 年遅れて渡伯したという。

渡伯した両親はサンパウロ州カンピーナス市で綿花栽培に従事したが，資金を貯めると知人を頼り 1969 年にサンパウロ市近郊のマウアー市に移住し自営農家となった。しかし農業は身体的負担も大きく母親が体調を崩したため，沖縄出身の知人に勧められ 1975 年に移動朝市（フェイラ）でのパステウ製造・販売に切り替え，その後長らく同業に従事することとなった。1968 年に生まれた安富祖さん自身もその仕事を「学校ない休みとか土日とか夏休みとか手伝った」といい，その経験を次のように語る。

> 安富祖:トレーラーで毎日違うところ（行って),半日だけ（営業する)。むちゃくちゃ面白い。日本，ないものね。今日はこの道路でやる（ってなったら）もうその時は道路全部（移動販売）車で埋まる。面白いんだよね，毎日違う人に会えるからすごい楽しかった。

安富祖さんは「もちろん大変だよ，半日働いてて半日は準備しないといけない。でも一日じゃないから全然もう余裕」と語り，多様な人々と出会うことのできるフェイラでの経験がとても楽しいものであったことを強調する。そしてパステウ販売で資金を貯めた一家は，その後食料品店も開業し，ブラジル人を雇い入れながら長く経営していくこととなった。こうしてマウアー市に定着した両親は，安富祖さんにとってもう一つ重要な場となるものを用意した。それが沖縄会館である。

> 安富祖：沖縄会館はもう私の居場所。毎週土日休み，そっちでずっと友だちと遊んでた。沖縄会館行ってバレーボールやったりビリヤードもあって卓球もあったり，その後，居酒屋行ってみんなとわいわいしてて，いつも大体そういう（遊びができて)，楽しかった。(後略)
>
> （会館には）若者の時間あって，大体土曜日は若者いて，日曜朝まで遊んで。日曜日のお昼過ぎ（から）はお母さんたち，おばさんたちかおやじたちが頼母子やってたね。月 1 回そういうのやっていて。すごいいいのは，お金だけじゃなくて，やっぱりみんな会えるところ。たとえば日曜日第 1 はおばさんたち，第 3 はおじさんたち。で，使わない日は私たちが使ってた。バーベキューも毎

月毎月のようにやってた。やっぱり，会館楽しい。（後略）

多分，（沖縄系の子のうち）90％（は沖縄会館に）通ってたんじゃないかな，すごい楽しかった。別に携帯もなかったし，あの時代。でも，日曜日に集まるからみんな行く。やっぱ連絡なしで行ったら友だち会える，すごい楽しい。（中略）集まって話したり音楽聴いたり。ブラジル人って音楽とダンス好きで，大体そういう会館って踊る場所あるの，だからみんなそっち行って何かできる。パーティーの時いつもダンスある。

移住先社会への文化的適応の速度の差から，移民の子どもが親との間に葛藤を抱えがちなことは多くの先行研究で指摘されてきた通りである（Portes and Rumbaut 2001=2014）。実際に両親との間に葛藤も抱えたという安富祖さんにとって，沖縄会館は重要な「居場所」となったという。また「（沖縄の）文化守りたかった」両親にとっても，沖縄会館は子どもへの文化継承の場として重要な意味を持っていた。毎晩三線を弾いていた父親に勧められ，若者向けに会館で開かれていた三線教室に通った経験を，彼女は次のように語る。

安富祖：私は会館でその先生の下で，6年間ぐらいやってた。発表会に行ったり，他の会館行っておじいちゃん・おばあちゃんの誕生日にプレゼンしたり。

＊　：ご両親から言われて三線教室に通い始めたのですか？

安富祖：うん，言われたけど，もともとそういうの好きだったね。やりたかったね，三線。（中略）私とお兄さん，ずっとやってた。今は忘れたよ。でも（来日後に生まれた）娘は上手。上の娘も上手。下の娘もできる。家にある，三線。

＊　：三線教室は若い人も通っていたのですか？

安富祖：若い人だけだよ。大体10歳から18歳。その時，私14歳。Ton Ton Mi[6] 知らない？　（世界の）ウチナーンチュ大会でもやったよ（＝演奏したよ）。昔，フジテレビの緑のやつと赤いやつ（＝ガチャピンとムック）と，半年ぐらい一緒に（子ども番組「ひらけ！ポンキッキ」に）出た。グループまだあるよ。（中略）（そのグループは）後輩，後輩，私の後輩。

安富祖さんは毎日お酒をたしなみつつ三線を弾いていた父親の姿を見，そして父親自身から勧められるなかで，沖縄会館での三線教室に通うことになったという。そしてこの沖縄会館は著名なブラジル人三線グループも生み出すなど沖縄文化の継承に重要な役割を果たすようになり，安富祖さん自身も子どもに三線を伝えていると語る。在日ブラジル人の子どもへの文化継承というと，それはブラジルの文化であることが暗黙の前提とされがちである。しかし上記の語りからは，ブラジルで継承されてきた沖縄文化が日本生まれの子どもたちに継承されていることが看取できる。

2. 両親の沖縄戦の経験と結婚への考え方

このように沖縄系の子ども同士で関係を築かせ，そして沖縄文化を受け継ぐ場を子どもに提供することの背景には，実は両親の大きな目的があった。安富祖さんによれば両親には，将来的に沖縄系同士での結婚を促そうという願いがあったのだという。

安富祖：あの時はやっぱり日本人は日本人と結婚してほしい，日本人と友だちになってほしい。あったよね，そういう何かブラジル人とあんまり付き合うなみたいな。ブラジルに住んでいても。

＊　：交流するのは日本人のほうがいいのですね？

安富祖：日本人じゃなくて沖縄の人。できるだけお友だちもやっぱり沖縄会館か日本会館。ブラジル人ってあまり，あまり好きじゃなかったね，そういう友だち。

安富祖さんによれば，「もちろん（近所に）ブラジル人もいたけど，でもやっぱり親関係で集まるのは日系人の子たちで，（沖縄）会館にも毎週毎週いて，ずっとその日系人と一緒に過ごしていた」といい，「学校行ったらブラジル人の友達もいたし，でも（ブラジル人の友達と遊ぶのは）学校の中だけ」だったという。そして日系人における沖縄出身者と本土出身者の差異に関しても，「沖縄会館があって沖縄の人しか参加できなかったから，（誰が沖縄ルーツかは）分かるは分かってた」という。沖縄会館の存在そのものが，メンバーシップの認識に強く影響を与えていたことがここから看取できる。

このような社会関係のもと同じ出身国あるいは出身地域同士での結婚が志向されることは，移民において決して珍しいことではない。しかし安富祖さんの両親が沖縄系同士での交際にこだわる背景には，それだけでなく，沖縄戦の経験があったのだという。

安富祖：戦争あったからそういう（＝沖縄系と結婚してほしいという考えに），なったみたい。（両親にとって戦争は）やっぱり怖かったね。（私がブラジルに）帰った時にちょっと話聞くと，やっぱり誰がいい人か分かんないし，沖縄の戦争あった時に日本人も沖縄人を殺したしアメリカ人も殺したから，誰がいい人か分からないから自分で守るしかない（と言っていた）。（中略）

もう覚えてるもんね。（戦争の時）お父さん 5 歳でお母さん 4 歳。でもそれ，大変だったから覚えてるね，忘れない。口で話した時に，やっぱり残ってるよね。だから，日本の人あまり好きじゃないとか，やっぱりいろいろそういう（経験が）あったからしょうがないよね。多分，忘れないかもね，ブラジルでそのまま忘れてない。

＊　：日本人をあまり好きではないというのは，日本軍にひどい扱いをされたと

いうのがあるのですか？

安富祖：みたいね。目の前で見たからやっぱり忘れない。（中略）やっぱり，その時のお父さんのお母さん，1 人で 5 人の子どもたち守ったし，すごい大変だった。何かガマの中で隠れて食べ物ないとか。聞くとすごいつらいなって。

沖縄戦を経験した両親にとって，沖縄系の人々以外への警戒心は相当なものであっただろう。しかし安富祖さんは当時ウチナーグチを聞き大方の意味をつかむことはできても正確な意味はわからず，親子間の意思疎通に困難を抱えていたうえ，そもそも両親は沖縄戦のことを決して口にしなかった。そのため，沖縄系同士での交流にこだわるこうした背景を理解できなかったという。安富祖さんは「大人になってから（聞いて），『ああ，やっぱりつらかったね，大変だよね』」と思うようになったというが，しかし多様な人々が集まるフェイラでの経験に面白さを見出していた当時は「『何で何で？　ブラジル住んでるのに何でブラジル人と友だち駄目なの？』とかみたいに思ってた」といい，現在もこうしたブラジルの沖縄コミュニティのあり方には疑念をもっているという。

安富祖：お母さんいってた。外人危ないよ，何されるかわからないよ。ブラジル人のこと外人っていう。もう，なーんでも外人外人外人。今だったらね，外人は差別語，（正しい言い方は）外国人ね，わかるけど。そのときはもーう，外人外人。本当は自分たちが（ブラジルでは）外人なのにね。おかしいと思わない？　でしょ？　家に入れるのも外人だめ。日本人。なるべく沖縄の人。沖縄の人以外だめ。（中略）だからね，沖縄のコミュニティはゲットー化してる。沖縄の人で固まってる（藤浪 2020: 143-144）。

このように安富祖さんの家庭では沖縄戦での経験を背景に，沖縄系同士での結びつきが重視され，そして沖縄系同士での結婚が促されてきた。彼女が移民の子どもとしてもったこうしたコミュニティへの違和感が現在の活動と関連付けられることとなるのだが，この点については IV 章で後述することとしたい。ここではさしあたり，両親の結婚への考え方が，さらに彼女の大学進学にも影響を及ぼしたことを確認しておきたい。

安富祖：（女性が大学に進学するのは）ブラジルでは普通だったけど，やっぱり日本人の考え方，あの時，違ったのかな。女は別に大学行かなくていいって，お金の無駄って言われたことはあるね。やっぱり，結婚したら名前（＝苗字）変わるし別に大学行かなくていいって言われたんだけど，行きたかったから。

＊　：お金の無駄って言われたのはご両親に言われたのですか？

安富祖：そう，お母さんからね。多分，同じ女性だから，そう思ってたんじゃない？

あの時,「何言ってるのかな」って思ったんだけど（笑)。（中略）でもお父さん，すごい優しい人で, やっぱりきょうだいでみんな一緒, 同じでずっとやりたくて，だから別に大学もオッケーに。あの 2 人がけんかしたけど，私，取りあえず大丈夫（笑)。

安富祖さんは「結婚したら名前変わる」という理由，つまり女性は結婚すればほかの家のものになるという考え方のもと，大学進学に関して母親から強い反対にあったという。安富祖さんはこれに続き，長男優先の考え方が両親にあったことを指摘する。

＊　：男優先の考え方があったのですね。

安富祖：あるね，あるね。今は分からないんだけど。学校（に関しても)，私たちは普通のパブリックの学校，長男は私立。洋服も何かちょっと違うなって。（長兄と長兄以外とでは）ブランド（の洋服）とブランドじゃない（洋服で分けられていた)。あと, 私たちにはいつも休みの時に市場で「手伝って」とかずっと言っていて，長男には言わないね。でも大体，長男見ると，自分の（家族）だけじゃなくて, 他の（家族も）大体だらしないね（笑)。そうなっちゃうんだよね, 何か。

こうしたきょうだい間の格差の背景には家父長制をめぐる問題があろうが，大学進学に関しては父親が母親を説得し，安富祖さんは大学で建築デザインを学ぶことができたという。そしてこの大学進学が来日後の日本語能力の形成に影響することとなるのだが，この点については III 章で後述することとしたい。

以上, 安富祖さんのブラジルでの生活史を検討してきた。ここで確認しておきたいのは, ①沖縄戦の経験を背負う両親をはじめとして地域の沖縄出身者により建設された沖縄会館が,「移民の子ども」であった安富祖さんにとって重要な居場所となった一方, ②多様な人々と交流するフェイラでの経験にも楽しみを見出していた彼女は，沖縄系以外との交流を忌避するコミュニティのあり方に対して疑念をもっていたことである。こうした経験は現在の支援活動に関する考え方に関連付けられることとなるのだが，この点については IV 章で確認することとし，続く III 章では安富祖さんの日本での生活史から当事者支援を始めるようになった経緯を明らかにしていきたい。

Ⅲ．日本での生活史――日本語の習得と可視化された在日ブラジル人の困難

1．学歴と言語能力――大卒ゆえの日本語能力の形成

大学まで卒業し経済状況も安定していたという安富祖さんは，1990 年になぜ日本に移住するようになったのであろうか。その一つの理由としては,「お父さんの夢というか, やっぱり 1 人 1 人日本に来て親戚と会って，あと文化学んで 2 年ぐらいで戻る」，そのなかで

「親戚に沖縄文化（を学んできてほしい）」という父親の願いがあったという。安富祖さんの次兄も安富祖さんに先んじて渡日し，半年間ほど沖縄の親戚の家で暮らしながら日本語を学んでおり[7]，両親は安富祖さんや次兄の渡航費などを負担してくれたという。

渡日の理由としてはもう一つ，安富祖さん個人としても「1 人暮らししたかった，家を出て自分でどこまでできるのか」という思いもあったという。大学まで 2 時間半かかっても 1 人暮らしが許されず，毎朝 5 時に自宅を出て最終バスで帰宅していたなかで，ブラジルで暮らし続ければ「絶対，1 人暮らしできない」と考え，渡日することにしたのだという。ただ 1 人での渡日には不安があったため沖縄会館の友人とともに渡日し，「そっから自分で稼がないといけなかったから，（沖縄ではなく）こっちに（＝群馬県に）来て働いて，それで沖縄に時々遊びに行く」というスタイルをとったと語る。

彼女が移住の際に頼ったのは，ともに渡日した友人の親戚であった。その人物が群馬県伊勢崎市に暮らしていたため，彼女らも同市の食品加工工場で働くことになったという。当時伊勢崎市にはすでに多くのブラジル人が暮らしており，「着いた時に，ほんとびっくりした。ここ日本？　もうどこもブラジル人しかいなくて，びっくりした。全然，日本語は使わなかった」と語る。ブラジルの沖縄コミュニティでは日本語ではなくウチナーグチばかり聞いていた安富祖さんは，そのような環境でいかにして日本語を習得したのだろうか。

彼女によれば，高卒の人々は主にアイスクリームの箱詰めなど日本語能力の不要な職場に配置されていた一方，「私たち大学行ったから他の（高卒のブラジル人とは違う）ちょっといいところ行って，機械のオペレーター（をやることになった）」が，機械のオペレーターには日本語能力が求められ，「すごい大変だった，日本語できなかったし漢字とか読めないし」と語る。そうしたなかで「（職場の）周りみんな日本人だしみんな優しかったから，いつも日本語教えて（くれた）」という。安富祖さんは「（高卒の人たちは，あまり日本語能力は）伸びない」と語り，学歴という文化資本により職務配置が決まり，結果として日本語能力に差が生まれることがここから看取できる。

2. 可視化される在日ブラジル人の困難――日本語能力ゆえの就労現場

こうして群馬県で暮らしていた彼女が次兄を頼り鶴見に移住するようになったのは[8]，1993 年のことであった。ともに来日した友人が病に倒れブラジルに帰国したことが，鶴見への移住の背景にあったという。

> 安富祖：友だちもちょっと病気になって帰っちゃったの，ブラジルに。その時（群馬に）友だちはいたんだけど，やっぱり何か，あっちいても人生進まないと思った。だってみんなブラジル人，日本語も何か物足りない。やっぱり，せっかく日本に来たからもっと日本を知りたいし，日本人とも友だちになりたかったし。あとプ

ラス，お兄さんもこっちに住んでたから，1 回来て「ああ，全然いい，やっぱり群馬と違う」（と思った）。それでこっちに来た。

学歴を背景に日本語を身につけつつあった安富祖さんは，日本に残り生活を続けたいと考え，すでに沖縄から鶴見に移住していた兄を頼って転居したという。鶴見でも群馬県在住時と同様に派遣会社からの紹介で大手電機会社の顕微鏡検査の仕事に従事していた安富祖さんであったが，結婚後 1995 年に長女が生まれると子育ての都合でアルバイトとしてブラジル料理店で働くようになった。この料理店での就労にも，日本語能力の有無が大きく影響したという。

安富祖：最初はやっぱり子どもいたから時間あまりなくて（ブラジル料理店で）バイト始めて，私，ずっとブラジルであの店（＝両親のパステウ店）やってたじゃん。だからバイト始めたら，その時の社長が「おお，すっごいできるんじゃない？」ってすごい目で見て（きて），半年で店長になっちゃった（笑）。その時（私は）もう日本語できて，やっぱり日本人のお客さん結構来たし，誰か日本語しゃべれないとちょっと日本人のお客さん（の相手）できないから（就労できた）。あと，ずっとブラジルで店やってたからその雰囲気もあるよね，「いらっしゃいませー」とか（笑）。

鶴見のブラジル人コミュニティの経済基盤は，自動車産業等の工場労働への派遣により成り立つ群馬県や東海地方のブラジル人コミュニティのそれと大きく異なる。鶴見の場合，男性に関しては自営電設業が産業基盤となっており，かれらは電気設備業者として日本人と同じ建設現場で働くため半強制的に日本語能力を身につけさせられる。その一方，ブラジル人女性にはそのような就労先が少なく日本語能力を身につけにくかったばかりか，そもそも女性は人口上多くはなかった。そのようななかにあって，日本語をすでに一定程度身につけていた安富祖さんは，料理店にとって得難い存在であったという。

そしてフェイラで子どものころから接客経験を積んでいた安富祖さんは，半年のうちに店長として働き始めるようになった。すると閉店作業なども担わなければならなくなるが，そこで安富祖さんは，デカセギで来日したブラジル人が生活のなかで寂しさや困難を抱えていることを実感するようになったという。

安富祖：（料理店で）働く時間すごい長い。寝る時間，大体毎日 4 時間かな，たまに 3 時間。たまに帰らないお客さんいて，やっぱり相談がね（多かった）。やっぱり寂しい人いっぱいいたね。考えてみると，1 人で日本に来て周りに親戚いないじゃない？　ご飯食べて帰ったら誰もいない。やっぱり誰かと話したいんだよ

ね。職場の人もあまり合わないとか。お店へ来て話をすると，そういう人すごい多かった。特に男性。で，こっち女性だったじゃん。やっぱり，そういう職場（＝電気設備業関連の職場），大体，男性でしょう？　やっぱり女性と話したいとかそういう（気持ちもあって），朝まで話（聞いて）。お客さんだし，でもずっと楽しいって（言ってくれた）。（私としては）「帰りたいな」，「ああ，疲れた」，「でも帰れない」。毎日のようにだったね，そういう相談したい人とか話したい人（が来るのは）。

広田（2003）が指摘するようにエスニック料理店は，行き場所のない外国人にとって「繋留店」として機能する。そして安富祖さんは店員として話し相手となり生活上の相談を聞いたりするなかで，ブラジル人の抱える問題に対して認識を深めるようになったという。

こうして3年ほど料理店で働き自身も子育てとの両立に困難を抱え始めていたころ，ブラジル人男性客にその日本語能力や接客スキルを買われ，安富祖さんは国際電話のカードを販売する代理店の鶴見事務所に転職することとなった。そしてこの会社でもブラジル料理店と同様に，在日ブラジル人から多くの相談を受けたことが，現在の支援団体を結成するきっかけとなったという。

安富祖：（国際電話の代理店として）いろんな人と話してて，相談とか日本のいろいろのことを聞いたり，そういうのあったからNPOできたのかな。うん。ほんとはあの時の仕事は，国際電話とかNTTのインターネットサービスとか（の受付だった）。

やっぱり，（こちらが）ポルトガル語話すとみんな聞くんだよね，いろいろ。ほんと日本人から見るとすごい普通（なことを聞かれる）。たとえば，「宅急便来た（けど），誰もいなかった。あの不在の紙（＝不在配達票がポストに）あった。それどうすればいい？」とか，「どうすれば荷物（受け取れるのか？）」とか，（そういうことが）分からない。「市役所行ったら何か紙もらった」とかそういうほんと細かいもの。

（日本人なら）普通にみんな誰でもできる。でも外国人はできないし。日本語も読めないから。もうみんなほぼゼロだから，日本語。だから「これ，どうすればいい？」とかそういう相談はいっぱいあった。「子どもの小学校行ってこういうリスト（に載っている学用品を）買わないといけない（けど），これ（は）何ですか？」みたいな，上履きとか糊とかほんとにそういう（日本人からすれば）普通な（ことを），みんな（外国人は）分からないから，ほんといろんな相談（を受けた）。だから，そういう団体できたかなと。

安富祖さんは，デカセギで日本に来た人々は「みんな寂しいんだよね，やっぱり」と語り，今でも「ポルトガル語話すと言ったら，もうどんどん話が長くなる」という。そしてブラジル料理店に続き国際電話の代理店でもこうした経験をするなかで，団体設立を考えるようになったという。それは具体的なきっかけがあったというわけではないが，多くの相談を非公式に受け続けるなかで正式に支援の看板を掲げ対応したほうがいいということで,「（設立は）流れだったね。『つくりましょう！』じゃなく流れ。どんどんどんどん,『あ，これいいな』と思って」設立に至ったという。

もちろんこのような団体で働いても恵まれた給料を得られるわけではない。しかしブラジル人男性にとって自営電設業者として生計を立てることが可能な鶴見において，「私の場合，女性，旦那いるから何とか」なったという。また「鶴見，もともとそんな仕事ない。女性（には）ない。大きい工場ない」と語り，鶴見で女性が給料の良い仕事に就くのは難しかったこともあるという。そうしたなかで，もともとデカセギ移住ではないうえこれまで支援の必要性を痛感してきた彼女にとって，団体での活動はやりがいを感じさせるものだったという。このように鶴見のコミュニティにおけるジェンダー構造と彼女自身の来歴のもとでこそ，安富祖さんは支援活動を展開することになったのである。

こうして団体を結成した安富祖さんは，ブラジル人を中心とする移民の相談対応をメインの活動として始めるようになった。そうしたなかで鶴見区役所と連携して多文化共生イベントも手掛けるようになり，2005 年には「助成金（獲得）とかいろんな（活動），行政と一緒に（事業を）したり，やっぱりちゃんとした団体じゃないとちょっと，特に外国人だし難しい」ということで団体を NPO 法人化することとなった。そして行政や学校，そのほかの支援団体などとの連携体制を整えながら，現在まで活動を継続してきたという。

以上，団体結成までの安富祖さんの日本での生活史を確認してきた。ここで確認しておきたいのは，①沖縄での親戚との交流と沖縄文化の学習を望む父親の願いのもとに安富祖さんが渡日したこと，②父親のおかげで獲得した大卒という文化資本が日本語習得に結びついたこと，そして③日本語能力を買われ就労した職場で，在日ブラジル人が抱える困難を認識するに至ったことである。そしてもちろん，④鶴見のブラジル人コミュニティのジェンダー構造が，安富祖さんの支援活動を可能にするものとなっていたことも重要である。

こうして団体を運営するようになった安富祖さんは「2009 年から教育に力を入れるようにな」り，「今も一番力入れてるのは教育」だという。続く IV 章では，以上のブラジルや日本での経験との関係においていかに子どもの教育に力が入れられ，そして親への支援や日本人にも開かれた居場所作りが志向されるようになったのかを検討してみたい。

Ⅳ．当事者支援への考え――親への支援と日本人に開かれた居場所作り

1．親への支援の必要性の認識――移民の親・子どもとしての経験から

安富祖さんはそもそもなぜ2009年から教育に注力するようになったのだろうか。まず重要なのは，2009年に文部科学省の「定住外国人の子どもの就学支援事業（虹の架け橋教室事業）」が始まったことである。2008年にリーマンショックにより移民の子どもの不就学が社会問題化したことで始まったこの事業は，移民の子どもの就学を促す学校外での支援に対し助成金を交付するものであった。ABCジャパンでは兼ねてから教育に関する相談を受けることは多かったというが，資金上の問題で事業化が難しかった。そのようななかで，このような制度は渡りに船となるものであった。

もうひとつ重要なのは，2003年生まれの二人目の娘に関する安富祖さんの経験である。2009年といえば，まさにこの二人目の娘の小学校入学時期と重なる。安富祖さんが一人目の子育てでの反省を踏まえ積極的に学校とかかわろうとしたときに実感したのは，移民の親としての知識不足であった。

> 安富祖：上の娘は1人でちゃんと勉強できたから，真面目だったから多分できたと思うね。だって私，何も分からなかったね，その日本のシステム。でもやっぱり娘，一人でしてた。だから次の娘は，じゃあちゃんとやらなきゃって思ったんだけど，たとえば小学校の時，一番，ほんと情けないな，国語の音読知らなかった。音読（といっても），全然（その）言葉（自体を）知らなかった。2番目の生まれた後に(音読という言葉をはじめて)知った。ということは上の娘は，1人で全部やっていた。国語とかすごい大変だったみたい。それ全然知らなかった。本当はそれ，親（が）やるべきだったのに。

一人目の子育ての反省を踏まえ自身で学校のことに取り組もうとしたときに，日本の教育に関する知識がほとんどないことに改めて気付いたという。こうした移民の親としての経験は，安富祖さん自身の移民の子どもとしての経験とも重なるものであった。安富祖さんは，自身の子ども時代に両親に学校に関する相談をできなかったことを「残念」だったと表現し，次のように振り返る。

> 安富祖：私，ブラジルにいた子どもの時に，親が日本人じゃん。（親は）言葉分からない，ブラジルの（教育の）システム分からないから，私，大学まで1人で全部やった。でもたまにあるじゃん，そういう分からないところ。でも相談する人，誰もいなかった。周りの人みんな，やっぱりおじさん・おばさん，同じ日本人だからポルトガル語話せない。でも，やっぱり難しかったね。私の周り友だちも大体同じ，何でか相談はできなかったね。会館でみんな過ごしてたけ

ど，そこまで細かいところは話しなかったね。やっぱり自分 1 人で全部やったから。でも，たまに何かポルトガル語で話したかった。でも親は日本語，ポルトガル語できなかったから，それ，ちょっと今でも残念だなと。あまりコミュニケーションなかったから。

移民の子どもの支援を行う団体の活動の焦点は，多くの場合，その子ども自身に当てられる。しかし ABC ジャパンでは，とかく移民の親への支援に力を入れている。たとえば日本語教室では，先述したように運動会や文化祭，保護者面談などといった学校行事に合わせた日本語学習が行われる。フリースクールに通う子どもの状況に関しても，毎月レポートで親に連絡がなされているほか，適宜親との面談を実施し教育に関するアドバイスを行っている。状況によっては親と学校を仲介し，両者の面談の場に同席することで，親が学校に的確に相談できるようにしている。さらに小学校入学から大学進学，さらにキャリア形成に関しても親が知識を得られるように，多言語でガイドブックを作成し，対面・オンラインでガイダンスを実施している。こうした親への支援の充実の背景には，上述のような安富祖さん自身の移民の親・子どもとしての経験があるのである。

安富祖：でも私もそうだけど，他の外国の人の，もう全然知らないと思う。だから，私，いつもそういうマニュアル（を作って配る）だけじゃなくて 1 回説明したり，その人たちから電話来ると相談したり，少しずつ少しずつ（やっている）。それで，子どもが学校で恥ずかしくならないようにいろいろサポートしてる。

またこうした移民の親への支援の必要性の認識は，安富祖さんにおける移民と日本人との交流の重視にもつながっている。多くの場合，文化資本や経済資本が十分ではない移民にとって重要になるのは，社会関係資本である。とりわけ日本人とのつながりは，教育に関する情報を得るうえで重要な社会関係資本となるという。

安富祖：いつも（移民の親に向けて）言ってるのは「保育園の時に 1 人でも日本人のお友だちつくってください」。保育園の時に送り迎えしないといけないから必ず朝か夜，夕方，会うじゃない？　お母さんと。小学校入ると送り迎えないからもう会えなくなる。チャンスは保育園だけ。だから，保育園の時にいい友だち 1 人でもつくったらいろんな情報来る。私，いっぱい情報もらったから，上の娘（は），大学まで行けたかもしれないね。やっぱり難しいよね。（教育に関する）システム，ほんと（国によって）全然違うから。漢字は難しいね。漢字は難しい。

一定程度の日本語能力を身につけ支援活動に奔走する安富祖さんでさえ，漢字の読み

取りは難しい。学校や教育制度の情報を自身で収集するのが難しいのはもちろん，文字化さえされない暗黙の学校文化等は知り様もない。そうしたなかで安富祖さん自身，日本人の友人から得られた情報が大きく役立ったという。こうして移民の親における日本人とのつながりの重要性を認識したことは，日本社会における「マナー」を重視する姿勢にもつながっている。

安富祖：たとえば，入学式，日本ってスーツ（を着用するのが一般的）とか外国人，分からないじゃん。普通（の服で出席すると）目立っちゃうじゃん，嫌な目で見ちゃうよね。やっぱり最初からそれ（＝「普通」のふるまい）をしないと。（でもその「普通」を）みんな分からないから（できない）。悪い人じゃないし。でも，最初からそれやったら（＝「普通」と異なるふるまいをしたら）もうずっと卒業するまで「あの親が良くない」とかね（言われてしまう）。だから最初からそういうマナーを言わないと，ただちょっとだけのあれ（＝ふるまいの違い）で（色眼鏡で見られて），（子育てや学校の情報を）教えてくれなかったら辛くなるんじゃない？　子どもも恥ずかしいし，親のことを。

私も恥ずかしかったね，ブラジルで。「ああ，親，ポルトガル語しゃべれない，もし学校行ったら，変な言葉言ったら恥ずかしい」とか子ども思っちゃう。こっち（＝日本）の（移民の）子どもたち同じね。やっぱり，子ども悪くない。

日本語教室の参与観察をしていると，日本語だけでなくさまざまなマナーが伝達されている場面に出くわすこととなる。ゴミの出し方はもちろんのこと，日本風の弁当・食事の作り方やあいさつの仕方など，伝えられるマナーは多岐にわたる（藤浪 2020）。このような姿勢は一見同化主義的にも映るが，それは日本人とのつながりこそが子育てにおける重要な社会関係資本だという認識の裏返しなのである。さらに安富祖さんはこの点を自身の移民の子どもとしての経験からも重視しており，子どもが親に「恥ずかしい」思いを抱かないためにも親がマナーを身につける必要があるとし，「子どもの経験やって今は親の（経験）。やっぱり両方感じたから。だから多分，こういう活動できるんじゃないかな」と語る。

2.「鶴見人」アイデンティティと日本人にも開かれた居場所作り

ここまで安富祖さんが親への支援を重視する背景に，自身の移民の親・子どもとしての経験，その双方があることを確認してきた。彼女が日本人との交流を重視する背景には，上述のように社会関係資本としてのその有用性があるのだが，ここで確認しておきたいのは彼女が「ゲットー化している」と評したブラジルの沖縄コミュニティへの違和感もまた，

日本人に開かれた居場所作りを志向するうえでの重要な参照点となっていることである。安富祖さんによれば，そもそも現在の団体を運営するうえでイメージしてきたのは，自身が「居場所」としてきたブラジルの沖縄会館であるという。

安富祖：私，ずっと会館を過ごしてたじゃない？　ブラジルで。会館と団体，あまり変わらないよね。会館はもう居場所。だから，日本にも居場所をつくりたかった。（後略）

＊　：現在の活動には，沖縄会館のイメージがあるのですね。

安富祖：あるある。誰でも来ても「あ，居場所だね」って。だから結構，こっちも日本人来るしね。それが楽しい。誰でも来ても（迎え入れる）。コロナで去年（＝2020 年）からそれできなかったけど，今日みたいに急に人来て（迎え入れて話を聞く），そういう感じ（でやってきた）。いつ来ても「いらっしゃい」って（言える），そういう場所だったらいいなって。とくに外国人そういう場所あまりないから。やっぱりもうないと困る。だからできるだけ頑張ってこれずっと続けるよね。

安富祖さんが「ブラジルの沖縄会館，すごいよね。むちゃくちゃ，もう体育館みたいね，（鶴見区内の潮田）地区センターみたいね」と語るように，実際の沖縄会館は規模が大きい。そのため安富祖さんは「鶴見でも会館つくりたいなって何回か思ったことある。ただ，場所が高いじゃない？　だから無理無理無理，家賃払えない」と語るが，規模は小さいながらも沖縄会館のイメージを付しながら，この団体を人々の「居場所」としたいと考えているという。実際に，フリースクールでは球技大会や遠足，先輩後輩交流会などさまざまなイベントが開催され友人作りが促されたり，年齢の近い大学生ボランティアが支援者となり子どもたちが話しやすい環境を作り出したりするなど，居場所としての場作りに力が入れられている。しばしば学校の帰り道などに教室に立ち寄り，支援者や後輩などとたわいもない会話をして帰る卒業生たちの存在は，居場所としての教室の機能の証左であろう。

もちろん移民の子どもにとって支援団体がこのように居場所となること自体，さして珍しいことではない。ここで重要なのは，安富祖さんにおいて，ブラジルの沖縄会館が肯定的な意味だけでなく否定的な意味でも，団体運営のイメージの源泉となっていることである。安富祖さんは「私，日本に来て子どもができて，別にブラジル人だけ付き合うじゃなくて，別にないんだよね，その心配は（＝ブラジル人とだけ交際関係を結んでほしいという考え）。（ブラジルの沖縄系 1 世の人々は）やっぱり昔の人だよね，考え方，全然違う」と語り，団体をその出自にかかわらずさまざまな人に開かれた居場所にしたいと考えているという。そのようなイメージのもとで出てくるのが，上記後段の語りなのである。

沖縄戦の経験を背景に沖縄系の人々以外との交流に否定的であった両親――その考え方への違和感のもと国籍や出自を越えたコミュニティを形成しようとするその活動のあり方は，彼女なりの沖縄戦の批判的継承なのだともいえよう。そしてこうした考え方は，団体運営のあり方そのものにも貫かれている。

安富祖：もちろん ABC は 1 人じゃないから。すごい（多くの）人たち手伝ってるし，こっちも手伝えるし。やっぱり，外国人だけの団体，多分うまくいかない。でも，日本人だけの外国人サポートする団体もうまくいかない。やりたい気持ちはあるんだけど，どうやってやるのか分からない。もともと（日本人だけだと外国人の気持ちが）分からないから。だから，こっちは両方，ブラジル人もいるし日本人もいて，他の国の人たちもいるから多分うまくいってる。やっぱ，いろんな気持ちの人を分かんないと，多分，団体つくれないと思う。特に外国人サポート。うちはチームワークでやってるからね，楽しくやってるよ（笑）。

安富祖さんは，支援者として多くの移民や日本人を巻き込みつつ，かれらにとっても「居場所」となるよう団体を運営している。気軽に参加できる支援者同士の軽食会をしばしば開催するなど支援者同士の関係作りに力を入れているほか，毎年支援者をねぎらうイベントを開催し支援者全員への感謝状を贈呈したりするなど，大学生ボランティアを含めかかわる人すべてに団体の一員としての意識も醸成している。このように「日本人／外国人」という二項対立的な関係性を揺るがし，国籍や出自を越えたコミュニティの形成を促す安富祖さんは自身のアイデンティティを次のように語る。

安富祖：私が（ブラジルに）いた時，私外国人だったね，「日本人，日本人」（と言われた）。（でも）日本来た時には「外人，外人」とか「外国人，外国人」（と言われた）。
＊　：ブラジルでも，「ブラジル人」とは認めてもらえなかったのですね。
安富祖：そう，名前がポルトガル語でもないし，名前見ると全然ブラジル人じゃないね（笑）。顔見ても，ブラジル人の顔じゃないし。ブラジルにいる時は「あ，日本人，日本人」（と言われた）。日本来たときには「外国人，外国人」。何か別に関係ないね，何人でもいい，だから鶴見人。一番言いやすい（のは）鶴見人。

このような語りが象徴するのは，安富祖さん自身，「在日外国人」としてのみその人生を送ってきたのではないということである。彼女はブラジルにルーツを持ちながら日本で生活を送ってきたのだが，そこでのブラジルとは安富祖さんが沖縄系 2 世として経験してきた社会である。「ブラジル人」でも「日本人」でもなく，また「地球人」でも「グローバル人」でもないその「鶴見人」というアイデンティティは，そうしたブラジルや日本で

の経験のもと，当事者支援の実践者として地域社会に根差しながらルーツを問わずに交流・協働していこうとする安富祖さんの姿勢を示したものであるといえよう。

V．おわりに

最初の問いに戻ろう。移民支援団体 ABC ジャパンを運営する安富祖さんは，自身の生活史との関係において，いかに日本人にも開かれた移民の居場所作りを志向しているのか。

以上の検討からわかるのは，安富祖さんのブラジルでの移民の子どもとしての経験，そして日本での移民の親としての経験，双方と関連付けながら，上述のような特徴をもつ活動を展開していたことである。移民の子どもとして親とのあいだに葛藤も抱えていた彼女にとって，沖縄会館はかけがえのない居場所となった一方，沖縄戦の経験を背景に沖縄系以外の人々との交流を避ける両親の方針や沖縄コミュニティのあり方には違和感を持ち続けていた（II 章）。沖縄文化を学んでほしいという父親の願いのもとで 1990 年に渡日すると，父親のおかげで獲得できた学歴が結果的に，在日ブラジル人の抱える困難への認識を深める職場での就労，そして移民支援団体の設立につながった（III 章）。団体においては，ブラジルでの親子関係や日本での親としての知識不足の経験を背景に親への支援を重視した教育事業を展開するようになり，そしてブラジルの沖縄コミュニティでの経験を肯定的かつ否定的に振り返りつつ，「鶴見人」としてルーツにかかわらず多様な人々に開かれた居場所作りを志向するようになっていた（IV 章）。

移民史研究や移民研究はこれまで日系ブラジル人の経験を，ブラジルと日本，それぞれの居住地ごとに切り分け議論してきた。しかし本稿で議論してきたように，かれらの生は決して切り離して理解されるものではない。そもそも出身社会と移住先社会を往還する人々も少なくないことを踏まえれば，移住の前後を切り分けることすら容易ではないはずである。そしてまた，南米移住前の日本（あるいは沖縄）での生活史が移住後のそれにいかに結びついているかについても，これまで積極的に議論されてきたとは言い難い。しかし安富祖さんの事例においては，渡伯以前の両親の沖縄での経験がブラジルでの生活のあり方につながり，そして安富祖さん自身の日本での活動にまで関連付けられていた。安富祖さんは両親の沖縄戦の経験を批判的に継承しつつ，在日ブラジル人としての現在の日本での活動を展開していたのである。本事例からは，移民の生活史は出身社会だけでも移住先社会だけでもなく，その双方のあり方に規定されながら積み重ねられていくこと，そしてその越境する生活史のなかでこそ，かれら自身がその生活や活動に込める思いを理解できることが示唆されているといえよう。

本稿ではたった一人の移民の生活史をたどったに過ぎない。しかし 1990 年入管法改定から 30 年以上がたった今，デカセギとして日本に移住した沖縄ルーツの南米出身者が日

本本土から沖縄へと再移住したり，あるいは日本本土の沖縄県人会に加入したりするなど，自らのウチナーンチュとしてのルーツに回帰するような動きも見られる[9]。そしてなかにはグローバルな沖縄アイデンティティの活性化に取り組む「世界のウチナーンチュの日」の発案者のような存在もでてきた（藤浪 2022）。かれらは一体どのような思いを抱え，そのような選択をとっているのであろうか。このような動きがみられる今，改めて移民史研究と移民研究の視座を結びつけながらかれらの社会的背景を検討し，その思いに真摯に向き合っていく必要があるように思われる。

【謝辞】活動に忙しいなか快くインタビューに応じ，本稿の内容も確認・修正くださったばかりか，実名での掲載も了承くださった安富祖さんに，心から感謝申し上げたい。なお本研究は，JSPS 科研費 JP21K13449 の助成を受けた。

注

1）移民支援団体の多くの団体は決まった曜日・時間に公共施設等を間借りする形で活動を行っているが，同団体は鶴見区の京急鶴見駅前のビルに教室・事務所を構えており，平日の営業時間中いつでも訪問可能な体制が整えられている。

2）たとえば藤浪（2022）においては「世界のウチナーンチュの日」を発案したアルゼンチン出身者を取り上げ，反差別という当該記念日に込められたその思いの背景に，アルゼンチンと日本，双方の社会での他者化の経験があることを論じた。

3）Tsuda（2003）や Suzuki（2010），Nishida（2017）などアメリカでの研究が，南米出身の在日日系人を日系ディアスポラ（あるいは沖縄ディアスポラ）の枠組みのなかに位置づけ，日本への移住を帰還経験として分析しているのとは対照的な状況にある。

4）専任職員は少ないものの，移民当事者として有する南米出身者とのネットワークや，活動の展開のなかで形成してきた地域の学校や行政機関，社会福祉団体，日本人住民などとのネットワークのもとで各事業を展開している。

5）たとえば 2016 年の熊本地震の際には，安富祖さんの有するネットワークのもとで在日ブラジル人をはじめとする多くの移民から支援物資 4 トンを集め，トラックで 16 時間をかけ被災地に届けた。また 2011 年の東日本大震災の際には数度にわたって宮城県や福島県を訪問し，仮設住宅住民向けにバーベキューを行ったり，農業の復興支援に協力したりするなどの活動を行った。

6）Ton Ton Mi は沖縄系 2・3 世で構成されるブラジルの民謡グループ。

7）長兄に関しては「親は、やっぱり長男だから家に残らないといけないから，『日本行きなさい』とか別にプレッシャーかけなかった。そういうとこ長男，大変だよね」と語っており，渡日に関してもジェンダーをめぐる問題が影響していることが看取できる。

8）安富祖さんの次兄は渡日後半年ほど沖縄で暮らしていたが，沖縄で親戚と暮らしていると自由にできないという不満を募らせ，沖縄で知り合ったデカセギのブラジル人に誘われ鶴見に移住したという。1980 年代後半時点での沖縄のブラジル人コミュニティでは，仕事のある場所として鶴見の情報が入ってきていたのである。

9）鶴見に暮らすブラジル出身者のなかには沖縄への移住を志し転居先を探していたり，自身の電気設備会社を息子に引き継いだうえで実際に沖縄に移住したりした者もいる。また横浜・鶴見沖縄県人会では，2010 年代後半以降，沖縄ルーツの南米出身者の加入も進むようになっている（藤浪 2019b）。

文献

伊豫谷登士翁，2007,『移動から場所を問う――現代移民研究の課題』有信堂高文社.

井沢泰樹，2013,「『多文化共生』の齟齬――在日ブラジル人の現状と施策の整合 / 不整合」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』15, 85-100.

小内透編，2010,『在日ブラジル人の労働と生活』御茶の水書房.

梶田孝道・丹野清人・樋口直人，2005,『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会.

広田康生，2003,『エスニシティと都市〔新版〕』有信堂.

藤浪　海，2019a,「ABC ジャパン」山脇啓造・服部信雄編『新 多文化共生の学校づくり――横浜市の挑戦』明石書店.

――――，2019b,「沖縄系住民をめぐる民族関係の再編成と都市政策――横浜市鶴見区の植民地主義・新自由主義的文脈に着目して」『年報社会学論集』32: 131-142.

――――，2020,『沖縄ディアスポラ・ネットワーク――グローバル化のなかで邂逅を果たすウチナーンチュ』明石書店.

――――，2021,「『当事者』としての外国人支援――NPO 法人 ABC ジャパンの取り組み」『自治体国際化フォーラム』379: 27-28.

――――, 2022,「世界のウチナーンチュの日と帰還移民」日本移民学会編『移民研究年報』28: 63-77.

山野上麻衣，2021,「『二回目の危機』――コロナ禍における南米系移民の人々の仕事と生活」『アンダーコロナの移民たち――日本社会の脆弱性があらわれた場所』明石書店.

ABC ジャパン，2022,「コミュニティづくり」ABC ジャパンホームページ（2023 年 1 月 3 日取得，https://www.abcjapan.org/community_dev/）

Nishida, Mieko, 2017, *Diaspora and Identity: Japanese Brazilians in Brazil and Japan*, Honolulu: University of Hawai‘i Press.

Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Oakland: University of California Press.（＝ 2014，村井忠政訳者代表『現代アメリカ移民第二世代の研究――移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店）.

Suzuki, Taku, 2010, *Embodying Belonging: Racializing Okinawan Diaspora in Bolivia and Japan*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Tsuda, Takeyuki, 2003, *Strangers in the Ethnic Homeland: Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*, New York: Columbia University Press.

（ふじなみ　かい・関東学院大学社会学部・講師・国際社会学）

Migrants' Transnational Life Story and Immigrant Support Activities: A Case Study of a Brazilian Woman with Okinawan Roots

FUJINAMI Kai

Kanto Gakuin University

(Sociology)

This paper explores the relationship between the social life and activities of Brazilians in Japan and their life histories through a case study of immigrant support developed by a Brazilian woman with Okinawan roots. Specifically, this paper shows that her activities, which seek to create a place for immigrants that is also open to Japanese, are related not only to her experience as an immigrant parent in Japan, but also to her experience as an immigrant child in Brazil.

Chapter II examines the history of her life in Brazil and reveals that while the Okinawa Kaikan became an irreplaceable place for her as a child of Okinawan migrants who had conflicts with her parents, she continued to feel uncomfortable with her parents' policy of avoiding interaction with people of non-Okinawan descent because of their experiences during the Battle of Okinawa. In Chapter III, the author discusses her life story in Japan, explaining how the educational credentials she acquired thanks to her father enabled her to learn the Japanese language, become more aware of the difficulties faced by Brazilians living in Japan, and establish a support group for immigrants. Chapter IV discusses her views on educational support for immigrants and shows that her own experiences as a parent and child of immigrants underlie her emphasis on supporting immigrant parents and her vision of creating a place for immigrants that is also open to Japanese.

Previous studies of Brazilians of Japanese descent in Japan have viewed them as alien "foreigners" in order to portray the social difficulties they face. However, the case of the Brazilian women discussed in this paper shows that their social life in Japan has been conducted not only in relation to their experiences as "foreigners" in Japan, but also in relation to their experiences as "Nikkei" or "Okinawans" in Brazil. The former has been studied mainly by sociologists in the field of migration studies, while the latter has been studied mainly by historians and geographers in the field of migration history. However, in order to understand the social life of Nikkei Brazilians, it is essential to link the two and examine them as the transnational life of a unique individual.

Key words : peer support, transnational life story, foreigners in Japan, Okinawan migrants, gender